

【発表者について】アンダーラインは本学教員、研究員および技術職員、○は発表者、※は大学院生、卒研究生または卒業生

学会名	公益社団法人自動車技術会関東支部2021年度学術研究講演会
演題名	実路試験による最新自動車の排出ガスが大気に与える影響に関する研究
発表者	○熊田 暉※, 新居 守人※, 眞保 享央※, 津田 洋子, 加藤 彰
内容	<p>2021年に英国グラスゴーにて開催された国連気候変動枠組条約第26回締約国会議（COP26）では、パリ協定にて世界平均気温の上昇を2℃まで許容されていたのに対し、1.5℃を目標として明記した。各国ではCO2や有害排出ガスの規制値を年々強化しており、日本では2018年から排出ガスの試験サイクルとしてWLTCが採用され、EUではRDE(Real Driving Emissions)が導入されている。RDE規制を導入している日本（2022年以降）とEU諸国の大気中NO2濃度を比較すると日本に比べて、EU諸国の年間平均濃度は高く、ドイツに関してはEU大気環境基準及び、WHOの年間基準値を超過しているといった報告もあり、この原因として2019年での燃料別自動車販売台数を比較すると、EUの自動車販売台数の内、約9割以上がガソリン車とディーゼル車であり、現在日本で主流と考えるハイブリッド車（以降HV）の割合が約40%低いことが一因である可能性があると考えられる。</p> <p>筆者らは2008年式のカソリン乗用車、試験車両A（日産セレナ）を用いて実路試験を行い、排出ガスと環境省が公開している大気汚染物質の測定値を比較し、20万km走行したガソリン車が大気に与える影響について報告した。</p> <p>本研究では新たに試験車両として最新のガソリン車とHVを設定し、排ガス計測を実路で行い、排出ガスと、大気汚染物質の測定結果を比較し、最新自動車の排出ガスが大気に与える影響について報告する。</p>
関連画像	